

たならば、そのやア他の者は敵ふまいが、汝が出るとは何だ、汝は  
總大将が、やアないか、後にには松田の先生がお控へになつて居る、大  
將は大將、同士の立合をいたすものぢや、それにお前が立合は、大  
は単生である、その喜惣太、降りよ、庄一郎様、貴方は九人までお勝ちな  
なれば負ける、この立合は必ずだ、お退がりなさい、もうお立合をなさ  
つたのぢや、もう立合はす、お退がりなさい、もうお立合をなさ  
な、喜惣太、降りよ、庄一郎様、貴方は九人までお勝ちな  
ごさい、喜惣太、降りよ、庄一郎様、貴方は九人までお勝ちな  
大先生、迎へなれども、庄一郎様、是非に及びませぬ、庄一郎様、  
す、お手柔か、に御教導に與りた、喜惣太、庄一郎様、常の立合なら  
ば、お手柔か、に御教導に與りた、喜惣太、庄一郎様、常の立合なら  
ら、お手柔か、に御教導に與りた、喜惣太、庄一郎様、常の立合なら  
で、お手柔か、に御教導に與りた、喜惣太、庄一郎様、常の立合なら  
共、お手柔か、に御教導に與りた、喜惣太、庄一郎様、常の立合なら

手の三手を以て、玄妙としてございませぬので、槍を向ふへニエトツと  
突き出すやうなことは、決して槍術の名人とは云へない、槍は後  
方へズツと引き、自分の額面と斜に見るくらゐに端穂の方を手許  
まで引き寄せ、敵手を自分の傍へ寄せ、着けぬやうに身構へをする、  
是れが槍術の極意でございませぬ、齊藤庄一郎に於ては、敵手が二間一  
尺の端穂附の槍でございませぬ、二間一尺、離れまして、中段にと  
タリと竹刀を構へます、これを打眺めた山村は、思はず知らず手を拍  
いて、熊蔵「うまいッ」と聲を揚げて賞めまする、宅平が「オイ、  
熊平、何がうまいのだい、熊平、其方達ぢやア分らない、ア、若旦那は  
餘ッ程うまいわい、宅平「ア、熊平、何が若旦那はうまいのだい、大島  
の先生は五百石の知行を戴いて居る槍術の御指南番ぢや、若旦那は  
九人までお勝ちなされたが、いま喜惣太先生のために打ち作される  
の、何が餘ッ程うまいのだい、熊平「其方達ぢやア分らないが、尋常  
の立合であつたならば、必ず若旦那がお勝ちあそばされる、なれど

間、龍、若、群、の、龍、九、様、を、初、め、六、戸、支、藩、の、片、桂、小、五、郎、其、他、家、中、一、同、  
 の、射、は、龍、虎、の、争、は、こ、れ、で、あ、ら、う、か、と、通、み、な、片、桂、小、五、郎、其、他、家、中、一、同、  
 去、り、た、竹、矢、來、の、外、な、る、何、姓、町、人、來、も、其、通、み、な、片、桂、小、五、郎、其、他、家、中、一、同、  
 龍、殿、に、勝、を、取、ら、せ、た、い、と、何、姓、町、人、來、も、其、通、み、な、片、桂、小、五、郎、其、他、家、中、一、同、  
 は、大、島、喜、太、が、再、び、ツ、と、何、姓、町、人、來、も、其、通、み、な、片、桂、小、五、郎、其、他、家、中、一、同、  
 大、島、喜、太、は、假、假、頭、を、掛、け、つ、て、居、り、ま、す、の、額、面、を、隠、し、こ、れ、  
 庄、一、郎、の、左、の、耳、の、所、へ、來、る、假、假、頭、を、掛、け、つ、て、居、り、ま、す、の、額、面、を、隠、し、こ、れ、  
 が、庄、一、郎、の、左、の、耳、の、所、へ、來、る、假、假、頭、を、掛、け、つ、て、居、り、ま、す、の、額、面、を、隠、し、こ、れ、  
 に、使、ふ、か、ら、さ、る、槍、柄、の、影、を、云、ふ、て、突、如、比、シ、ヤ、斯、る、場、合、  
 一、郎、の、耳、の、傍、を、打、つ、槍、柄、の、影、を、云、ふ、て、突、如、比、シ、ヤ、斯、る、場、合、  
 手、で、さ、い、お、し、す、槍、柄、の、影、を、云、ふ、て、突、如、比、シ、ヤ、斯、る、場、合、  
 の、ご、さ、い、お、し、す、槍、柄、の、影、を、云、ふ、て、突、如、比、シ、ヤ、斯、る、場、合、  
 其、の、影、を、太、く、二、間、一、尺、の、端、に、附、く、其、の、柄、を、振、つ、た、へ、か、ね、ま、し、て、  
 大、島、喜、太、は、槍、を、昆、沙、門、突、に、突、き、上、げ、ま、し、て、喜、怒、  
 大、島、喜、太、は、槍、を、昆、沙、門、突、に、突、き、上、げ、ま、し、て、喜、怒、

龍、殿、に、勝、を、取、ら、せ、た、い、と、何、姓、町、人、來、も、其、通、み、な、片、桂、小、五、郎、其、他、家、中、一、同、  
 は、大、島、喜、太、が、再、び、ツ、と、何、姓、町、人、來、も、其、通、み、な、片、桂、小、五、郎、其、他、家、中、一、同、  
 大、島、喜、太、は、假、假、頭、を、掛、け、つ、て、居、り、ま、す、の、額、面、を、隠、し、こ、れ、  
 庄、一、郎、の、左、の、耳、の、所、へ、來、る、假、假、頭、を、掛、け、つ、て、居、り、ま、す、の、額、面、を、隠、し、こ、れ、  
 が、庄、一、郎、の、左、の、耳、の、所、へ、來、る、假、假、頭、を、掛、け、つ、て、居、り、ま、す、の、額、面、を、隠、し、こ、れ、  
 に、使、ふ、か、ら、さ、る、槍、柄、の、影、を、云、ふ、て、突、如、比、シ、ヤ、斯、る、場、合、  
 一、郎、の、耳、の、傍、を、打、つ、槍、柄、の、影、を、云、ふ、て、突、如、比、シ、ヤ、斯、る、場、合、  
 手、で、さ、い、お、し、す、槍、柄、の、影、を、云、ふ、て、突、如、比、シ、ヤ、斯、る、場、合、  
 の、ご、さ、い、お、し、す、槍、柄、の、影、を、云、ふ、て、突、如、比、シ、ヤ、斯、る、場、合、  
 其、の、影、を、太、く、二、間、一、尺、の、端、に、附、く、其、の、柄、を、振、つ、た、へ、か、ね、ま、し、て、  
 大、島、喜、太、は、槍、を、昆、沙、門、突、に、突、き、上、げ、ま、し、て、喜、怒、  
 大、島、喜、太、は、槍、を、昆、沙、門、突、に、突、き、上、げ、ま、し、て、喜、怒、

のほごを願ひたうございませす 武本「イヤ熊平殿、拙者が答めべきは存  
 じて居るなれども、一方は拙者の門人であるから、我田引水のやう  
 に心得られては相成らぬと、故と差控へて居りますのちや、御立札  
 が立合をしたいたとあるならば、貴殿上下の差別なしと云ふ御立札  
 や、然らば御身出でられてお立合を召されよ 熊蔵「有り難うございま  
 す」と熊蔵は突如庄一郎の傍へ進みまして 熊蔵「若旦那、いまお持ち  
 なされた竹刀をお貸し下さい 庄「コレ熊平、殿様のお目通りちや、  
 無禮であらうぞ 熊蔵「イヤ御心配下さいませぬ、私は貴方の殿さでお  
 負いなされたのが實に残念で堪りませぬ」と其儘土壇の上へ飛上り、  
 り、大島喜惣太の傍へ参りまして 熊蔵「先生、私は齋藤庄左衛門の中  
 間熊平にございませす、イヤ一本のお立合を願ひたい 喜惣「黙れッ、  
 汝中間の分際を以て指南役たる拙者と立合はうなど、は無禮であら  
 う、汝ごとき中間風情と立合ふ大島喜惣太にあらす、無禮者奴が、  
 退がりてをらう 熊平「これは大島の先生、中間と立合はないと仰しやる

ア誰方此方の容赦はない 山「村熊蔵は早くも此身を眺めまして、  
 他の者に未練なる大島喜惣太、若旦那様は彼れより腕前が上なれば、  
 ズ卑怯な荷且にもお若年である、殿様の手に出さぬ身指南番であ  
 り、知らず、新場合に使ふからざる殿様の手に出さぬ身指南番であ  
 り、だわい、斯かる場合に使ふからざる殿様の手に出さぬ身指南番であ  
 り、へて居りませす、が、別々に松田先生は仰せになるでございませぬ、  
 を仕兼ねまして、熊蔵が松田武夫先生は仰せになるでございませぬ、  
 藤松田の御先、只今若旦那様、松田武夫先生は仰せになるでございませぬ、  
 ば、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 中、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 指、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 が、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 意、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 太、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 先生、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 一本、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 の、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 立、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 合、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 を、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 いた、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 した、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 う、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 ござ、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 り、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 せん、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 が、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 ば、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 是、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 非、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 にお、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 許、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、  
 じ、殿様の御手、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、御分、

のでございませうか、劍術は戦争の下積古でございませう、斯る太平の立合ならば、一人づつ、で事済みにもなりますが、スハ戦争と相成りますれば、敵が幾百名とも敷知れず、其中で若しも中間が貴方へ斬り込んで来た場合に、其方等は中間小者であるから立合をいたさないで、貴方は其者に黙つてお斬られぬばすか、イヤッ斯る太平の御代に於て、横合から貴方に對して恨を懐く中間共が斬り込んで参りましたら、其方は申問であるから斬合をいたさぬと、其儘お斬られぬばすか、そののみならず殿様のお棧敷の下に立て、ござりまする、彼の立札がお目に懸りませんか、本日は若殿様へ御馳走のため、家中一同に立合を許されましたので、貴賤上下の差別なく、劍術心懸けの者は出で、立合へと云ふのお示しではございませうか、貴賤とは貴き者も賤しき者も、上下とは上つ方も庶民も少しも區別がないので、些少たりとも武藝に心懸けのある者は、みな出で、立合へこの御沙汰でございませう、依つて私も武家屋敷に奉公を致し

まして、木刀持つ術くらゐは少々存じて居りますから、此所へ出ましたやうな譯でございませう、是非に一本お立合を下さるやう、それとも私の勇氣に怒れてしまひ、逆もこりやア敵はぬと思召されて卑怯にも中間であるから立合はないと、それを口實にお退がり召さる御了簡か、大島喜惣太殿、近頃以て御卑怯でござらう」と云へば大島喜惣太は大いに怒り、喜惣太云はして置けば言語同断、其の廣言の舌の根はいま止めて呉れん、拙者が持つた此の端穂附の槍が其方の眼に這入らぬか、是れは豈夫端穂附とは見やうまい、拙者が正面に突いたならば、眞槍よりはまた能く斬れるぞ、其方の一命はないのちや、宜いか、熊平ハ、大島先生、私も武家奉公をいたして居りまする者、斯る花々しき所に於て斬合をいたし、それに一命を奪らるれば身の本望でござる、イヤお出で召されよ、喜惣太、然らば豊悟をいたせ、イヤッとばかりに喜惣太が大島流の槍術を以て身構へをする、山村熊藏は長澤武兵衛先生より習ひ受けた極意、日

本に於ては餘り他に類のない中正眼に構へを爲し、左の手で看板の  
 裾を握り、ヤツと云ふ聲を掛けました、これが即ち長澤流の奥義で  
 ございまして、毎度申し上げます通り、體を落して胴を抜くと云  
 ふ手でございます、熊藏「イヤ突き込まれるなら何時なりともお出でな  
 さい」と身構へを致しました其の有り様、松田武太夫はこれを眺め  
 て驚いた、武太夫は普通の先生ではない、餘程の達人に相違ない」と  
 眼を着けます、齋藤庄左衛門は無論悴庄一郎もこれは普通の中間  
 でない、此者の腕前は實に恐れ入つたものである、勝敗如何であら  
 うと片唾を呑んで凝視めて居りました、此時大島喜惣太が繰り込ん  
 で参りました、其の槍先を暫く遇ひ居りました熊藏が、敵手の手許  
 へ近寄つたかと思ふと、熊藏「お籠手だア」と一聲叫ぶなり敵手の籠手  
 を太かに打つた、大島喜惣太は手に麻痺が来て、ガラリと槍を投棄  
 て、喜惣太「たッ」と云ふ聲を揚げました、熊藏は莞爾片頬に笑を含  
 み、自分も後方へ退がります、アア斯うなると西方の方は總大將が

敗られたのだから、誰一人も出る者はございませぬ、殿様にかかれ  
 ては、甲斐通れ、中間に似合はざる腕前である、齋藤庄左衛門  
 眼を注げてやれ」と云ふ言葉が掛つて、總て御師城と云ふことに  
 相成ります、これに依つて齋藤庄左衛門も御家老其他の人々と共に  
 殿様のお供をいたし、一時は御城内へ参りましたが、間もなく眼  
 を申し上げまして、自分の屋敷へ立歸りますと、松田武太夫も出  
 て参りましたので、ここに庄左衛門と武太夫とが相談の上熊藏を呼  
 びまして、庄左衛門殿、其許のお腕前は實に感じ入り奉る、何うか貴  
 方の御本名をお聴かせなすつて下し置かれうならば有り難う存じま  
 す、熊藏「イヤ齋藤庄左衛門殿、松田武太夫先生、甚だ失禮を致しまし  
 た、斯く云ふ私は尾州藩山村熊藏と申す者でございしますが、自分の  
 父山村惣右衛門並に姉お静が尾張の家で積積勘十郎と云ふ者に討ち  
 取られましたので、其の仇討をいたさんかために、艱難辛苦非人の  
 妾と相成り、關友殿の表に御厄介になつて居りましたが、遂に兵

御殿に先達を遣はしたのが御縁となり、斯く齋藤殿のお世話に相成りました。此でございませうと云ふを聞いた松田武太夫は、武太は山村熊藏、忠友先生とは御貴殿のこととござつたが、日外拙者の道場に來られた桃井周郎と云ふ人がある、是れは御貴殿御承知であるか、熊藏ハ、其の桃井周郎は私の兄弟子とございませう、武太イヤその桃井周郎殿が拙者の道場へ賓客られて暫くの間御滞在のうちに拙者の弟、子に山村熊藏と云ふ通れの者が出來た、萬一當地へ參ればまた宜しく御交際を願ふと云ふお言葉でござつたが、今日圖らず體を落して胸を抜くと云ふ長澤流の構へを見て、これは滅多に他に無い流儀だ、即ち桃井周郎殿と同じ構へである、これは多分長澤流の極意を受けた方であらうと、拙者は感ぜ入つたやうな譯でござる、此時齋藤庄左衛門は、庄左山村熊藏殿、此上は暫くの間、家内に御逗留の上、待庄一郎に御貴殿のお手の中を御指附に與かりたうとござる、熊藏イヤ自分は仇討の身ではあるけれども、一時の恩に舌を抜かれる世

の比、儼々これま五世話に相成つた儀でござりますれば、暫く御當家に足を留め、最と未熟なる腕前なれども、及ぶ限りは御教導を仕らうと、其日は酒宴と相成りまして、互ひに打ち解けて談合ひました、たが、それより熊藏は齋藤の屋敷に足を留め、毎日のごとく、庄一郎へ指して長澤流の教導をして居りました、此方は大島喜惣太、弟喜三郎の兩人でございませう、先日の御前の立合より、その門人はみな愛想をつかし、大島の道場を退がり、續々松田武太夫の方へ入門をすする者はかり、これがために道場は瞬く間に淋しく相成りました、されば今までは威張り散らして居りましたが、もう今では威張ることが出来ない、今日しも兄弟が顔を見合はして、兄弟實に残念である、彼の齋藤庄左衛門は何所からか斯る中間を雇ひ入れ來たつて、故意と拙者等に耻辱を與へたに違ひない、彼の熊平中間に掛つては敵は、おが、た、惜しいは齋藤庄左衛門、彼れを手に掛けて殺し、其上此の我の城下を出立いたさう、此所ばかりに日が照らない」と、悪人窮

するときは、必ずしもまた悪を行ふとやら、遂に兩名の者が密謀  
を凝らし、齋藤庄左衛門を討ち取らんと、時機の来るのを待ち受け  
ました。丁度其の年十二月中旬のこと、齋藤庄左衛門に於きまして  
は、萩の御城下を少しばかり距離しました磯部村と云ふ所に正圓寺と  
云ふお寺がある。此のお寺の海老和尚とは大變に圓茶の友達でござ  
います。自分の好きな道でございますから、毎度海老和尚の所へ指  
して遊びに参ります。今日しも雪見がてら好きな茶を圓みに出掛け  
二三面圓んだ上、酒を愛れて種々の話をいたし、纏て家來の宅平を  
従れまして、日がズンブリと暮れてから、蛇の目の雨傘を懸し、高  
下駄を履き、正圓寺を後目になし、今ぶら／＼と歸つて來ますと  
此所に一の小川がある。其の小川の橋詰へ掛つて來た折柄、不意に  
横合より、裏面頭巾の武士が飛び出たし、ヤツと云ふ一聲、諸共突  
來たつた槍先、庄左衛門は不意のこととございますから、少々太股  
をば突き込まれ、庄左衛門、車使者ツと云ひながら突如雨傘を棄て

一刀を抜き、其の槍の柄の所よりスパリとばかりに斬り落した、  
此時またもや一名、裏面頭巾の武士が現はれ出でまして、武士覺悟をい  
たせ、齋藤庄左衛門、能くも逃れ腕前の者を履ひ入れ、中間などに  
いたして我々に耻辱を與へた、斯く云ふ我々は、大島兄弟であるぞよ  
庄左衛門を申すか、車使者未練な奴めツと庄左衛門も一生懸命暫くの  
間は二人を相手に斬り結びました。が、先きに突き込まれた槍傷が痛  
んで参りました。十二分の働が出来ない、其のうち大島兄弟はま  
たもや一聲叫んで斬り込んだ、それがために肩先をば四五寸斬り下  
びられ、アツとばかりに聲を揚げ、後へに掻と倒れた庄左衛門、し  
でやつたりと兄弟は疊み掛けに斬り付けます。此處を打眺めた下  
郎の宅平は、腰を脱かさんばかりに打驚き、一目散に屋敷を指して  
逃げ出たしました。喜惣太喜三郎の兩名は絶息の刃を刺し、喜惣  
弟、斯うして置けば、大丈夫、何れ下郎が注進をいたしたから、悴  
の庄一郎が駆け付けて來るであらう、親の死骸に取り付いて黙いて

居る所をば、其方は一丁の下に斬殺せ、我は橋の小蔭に待ち受けて、彼の憎い熊平も来るであらうから、これを瞞し討ちにいたしてやる積りである。喜三承知致しました。と弟の喜三郎は片側に隠れる。兄の喜惣太は橋の橋手の小蔭に身を忍ばせ、沈む待ち受けて居りました。此方は宅平の野郎が屋敷へ歸つて参りますか否や。宅平「御注進な、父の供をいたして参りながら、驚いた庄一郎が庄「オ、宅平では、周章しく注進とは何事である。宅平「されば只今正圓寺から歸つて参ります。途中、彼の小川の橋詰まで来ますと、覆面頭巾の武士が兩名現はれまして、先日の遺恨ぢや、大島兄弟である、覺悟をせよと、親旦那様に斬り付けました。何しろ二人に一人、殊に不意のこととございませうから、親旦那様は少々負傷をお受けあそばされた。御様子、早くお出でなさいと、お一命がお危うございませう。これを聞いた庄一郎は「南無三、それは大變だ」と押取刀、素足のま

外外へ飛び出だし、右の小川を指して駆け付けます。中間部屋よりこれを聞いた山村熊藏は「熊藏「ウエ、憤りは大島兄弟の者、若旦那に萬一のことがあつては一大事、宅平、續いて来い」と同じく背後の方より飛び出しました。此方は庄一郎が瞬く間に小川の所へ来たり、橋を渡りますと、其所に父の庄左衛門が無惨なる死状をいたして居りますから、庄「ア、父上様、いま一足早かりせば、斯く阿容々々とお討たれあそばされぬであらうに、さても残念なことを致しました。と思はず死骸に取り付いて、兩眼に涙を浮かべながら、我を忘れて歎いて居ります所へ、息急き切つて橋の袂まで駆け付けて来たのが、これぞ山村熊藏にございませう。折柄不意に横合より、ヤツと一聲叫んで斬り込んで来た大島喜惣太の切尖、熊藏は體を轉し、まして「熊藏「何を仕をるか」と突如帯挟んで居りました。一刀の鞘を拂ひ、二刀三刀撃ち合はして居りましたうちに喜惣太の小髷の邊をバツと斬り付ける、這は敵はじと思つたか、喜惣太は一目散に向方を



指して逃げ出しました、何分熊蔵は主人庄一郎に心が引かれて居りますから、長追をしないで来て見れば、今や庄一郎は父の死骸に取られ、さめくと黙いて居ります、此時庄一郎の背後の方より忍び寄つた大島喜三郎が、一刀を振り上げながら、物をも云はず斬り下さんとするの体、これを見た熊蔵は、其の傍まで進んで行く暇がありませんから、小柄を抜くが否や、ヤーツと云ふ聲諸共に投げ付けた、スルと狙ひ違はず、其の小柄が喜三郎の肩先へグサリとばかりに突立つた、アツと揚げた喜三郎の聲に、庄一郎は驚いて振り返り、庄「汝れ我父を討ち奉つた大島喜三郎、親の敵だ、覺悟をせよ」と一刀を引抜いて斬り付けますと、喜三郎何を小癪な返り討ちであるぞよ」と喜三郎はこれを引受けて、チャリンと斬り合つて居ります、熊蔵若旦那、御心配なさるな、山村熊蔵が御助力を申し上げますぞ」と聞いた大島喜三郎、喜三「ア中間の熊平が出て来ては逆もちやアないが敵はない、愚圖々々して居ちやア一命が危い」と

遂に其儘何所もなく逃げ出しました、庄「おのれ敵、逃がしてなるものか」と主従の者は追駆けて参り、其所よ此所よと捜して見ましたが、逃足の遠い兩名の者、到頭行方が分らぬやうになつてしまひました、さて是れより萩の城主毛利甲斐守様のお取り成しに依りまして、熊蔵は庄一郎と義兄弟の縁を結び、自分の敵穂積十郎、且つは大島兄弟をも共に討ち取らんと、萩の城下を後にいたし、下の關より九州に渡り、肥前佐賀の城下へ参りまして、筑紫明神様の松原に於て、其頃城下の人々が恐れ慄いて居りました、天狗なるものを退治せんと致し、闘はずも天下名題の大森傑天野八郎に出遇ひ、これとまた義兄弟の約を結び、遂に道を後へ引返し、遙々加賀の金澤へ乗込みまして、大島兄弟に出遇ひ、庄一郎に力を添へて之れを討取らせまします、尙ほ諸國を遍歴致して居ります途中、奥州一の關において、彼の馴染藝妓でありました幸吉と不思議の對面を爲し、その手引に依つて、水戸齊昭公が立て、居られました水戸の弘道館

に乘込み、その副館長天野八郎等の助力に依り、父姉の敵愾積勤十  
 郎を討取りました。上、自分徳川幕府を打倒し、朝廷の御代に復さ  
 う。それを成して、當時の老中安藤對馬守は國賊であると云ふので、  
 江戸表は坂下門に於て、天野八郎等と共にそのお行列に斬り込み、  
 之れに一刀を浴せ掛け、天野八郎等の後、後、後、後、後、後、後、後、  
 三日、異れ多くも、陛下の御前に記り出でましては、明治五年十一月、  
 岡鉄舟先生と互格の立合をいたし、次いで西郷隆盛閣下と共に、  
 輿論の立たざるが爲めに、鹿兒島へ引揚げて、田原坂の劇戦に於て討死  
 を遂げます。その山村熊蔵の活動に就きました。義兄弟の天野  
 八郎も共にいろく、勇壯活潑なる動作を致しましては、義兄弟の天野  
 ら、本篇はこれにてお預りといいたし、後篇は副主人公の名を其儘に  
 表はしまして、『天野八郎』と題し、未等の願を詳しく講演致しま  
 す。から相變らば御愛顧のほどをお願ひ申して置きます。

山 村 熊 蔵 完

明治四十二年十月十一日印刷

講演者 廣澤當昇

發行者 柏原政次郎

印刷者 南谷新七

大賣捌 柏原奎文堂



不許複製

山村熊蔵奥附

明治四十二年十月十五日發行

大阪大 大賣捌

鳥の内同盟館  
 名倉昭文館  
 岡本増進堂  
 大淵駿々堂  
 立川文明堂

大阪西區北堀江下通二丁目二番地

大阪西區御池橋西詰南入

# ●人間必用の書籍大新版廣告

●北溪散人著作

●西洋綴金文字入類美製本全一冊

病理説明

醫學博士

附 健康養生法  
諸病豫防法

- 紙數五百頁餘印刷鮮明
- 正價金五十錢 ●三千部限り
- 特別金四十錢 ●郵便金十錢

●申込送金爲替は大阪市四ツ橋郵便局 ●郵券代用は二錢切手に限る(但し一割増)

近世醫學の進歩著しし發揚し、如何なる難病重症も、光明ある醫師の診断と成功せる外科の手術に依つて、全治する事難からず、然りと雖も人々自ら健康養生の法を研究して常に守り、夫に供ひ諸病の身体を侵害せんとするを、豫防するの義務あり、格言に曰人は病の器なりと、又如何に養生を守り豫防に務む、時に病魔の襲ふなきを期せず、病に緩急の別あり、素人と雖も急なる場合には、應急の手當法を心得置べきは、當然の事實にして文明なる人類社會の一日も欠べからざる者とす、故に今回先生に乞ふに先發病すべき病理上の説明を素人にも解し易く、四百餘病の救急手當と治療法、又自ら行ふべき健康養生法、守らざるべからざる諸病の豫防法等、最新式なるものを、實地に行はるべき様平易に記されれば、何人と雖も健康丈夫無病を望まると方々は本書を座右の寶典と爲し給へ。

# ●人間必用の書籍大新版廣告

●北 漢 散 人 著 作 ●西洋綴金文字入頗美製本全一冊

病理説明

醫學博士

附 健康養生法  
諸病豫防法

●申込送金爲替は大阪市四ツ橋郵便局の郵券代用は二錢切手に限る(但し一割増)

近世醫學の進歩著しく發揚し、如何なる難病重症も、光明ある醫師の診断と成効せる外科の手術に依つて、全治する事難からず、然りと雖も人々自ら健康養生の法を研究して常に守り、夫に供ひ諸病の身体を侵害せんとするを、豫防するの義務あり、格言に曰人は病の器なりと、又如何に養生を守り豫防に務むも、時に病魔の襲ふなきを期せず、病に緩急の別あり、素人と雖も急なる場合には、應急の手當法を心得置べきは、當然の事實にして文明なる人類社會の一日も欠べからざる者とす、故に今回先生に乞ふに先發病すべき病理上の説明を素人にも解し易く、四百餘病の救急手當と治療法、又自ら行ふべき健康養生法、守らざるべからざる諸病の豫防法等、最新式なるものを、實地に行はるべき様平易に記されれば、何人と雖も健康丈夫無病を望まると方々は本書を座右の寶典と爲し給へ。

●紙數五百頁餘印刷鮮明

●正價金五十錢●三千部限り

●特別金四十錢●郵便金十錢

## 柏原堂講談小說發行目錄

丸山平次郎 講談 九州征伐薩摩政	丸山平次郎 講談 九州征伐	丸山平次郎 講談 四國征伐	丸山平次郎 講談 味方ヶ原大合戦	丸山平次郎 講談 長篠大合戦	丸山平次郎 講談 長湫大合戦	丸山平次郎 講談 小牧山大合戦	丸山平次郎 講談 賤ヶ岳大合戦	丸山平次郎 講談 山崎大合戦	丸山平次郎 講談 武田攻眞田智謀	丸山平次郎 講談 金龍繩張大問答	丸山平次郎 講談 姉川大合戦	丸山平次郎 講談 美濃合戦	丸山平次郎 講談 桶狭間合戦	丸山平次郎 講談 太閤記	丸山平次郎 講談 小田原征伐	丸山平次郎 講談 朝鮮征伐後編	丸山平次郎 講談 朝鮮征伐三編	丸山平次郎 講談 朝鮮征伐四編	丸山平次郎 講談 關ヶ原軍記	丸山平次郎 講談 關ヶ原軍記後編	丸山平次郎 講談 關ヶ原軍記續編	丸山平次郎 講談 梁川庄八	丸山平次郎 講談 梁川義勇傳	丸山平次郎 講談 肥後の駒下駄	丸山平次郎 講談 月岡武勇傳	丸山平次郎 講談 鬼の清次	丸山平次郎 講談 戸田花子
------------------	---------------	---------------	------------------	----------------	----------------	-----------------	-----------------	----------------	------------------	------------------	----------------	---------------	----------------	--------------	----------------	-----------------	-----------------	-----------------	----------------	------------------	------------------	---------------	----------------	-----------------	----------------	---------------	---------------



録目行發說小談講堂文奎原柏

神田平次郎	伊賀	三十一番斬	省軒外史著	探偵	意恨の短銃
丸山平次郎	伊賀	柳生三嚴漫遊記	前野春亭著	探偵	電氣の慘殺
神田平次郎	伊賀	柳生武勇傳	山崎宇吉著	探偵	獄中の毒殺
丸山平次郎	伊賀	荒木武勇傳	山崎東海著	探偵	深窓の犯罪
神田平次郎	伊賀	響の大仇討	前野春亭著	小説	己が罪
丸山平次郎	安政	篠塚力之助	松島庵主人著	小説	根津四郎右衛門
丸山平次郎	安政	岡野三之助	酒井昇造著	探偵	木津勘助
丸山平次郎	安政	石井常五郎	酒井昇造著	探偵	銀行頭取謀殺事件
丸山平次郎	安政	一心太助	若柳熟地著	探偵	壯士の謀殺
丸山平次郎	安政	梅川忠兵衛	若柳熟地著	探偵	死美人
丸山平次郎	安政	蛇お六	若柳熟地著	探偵	

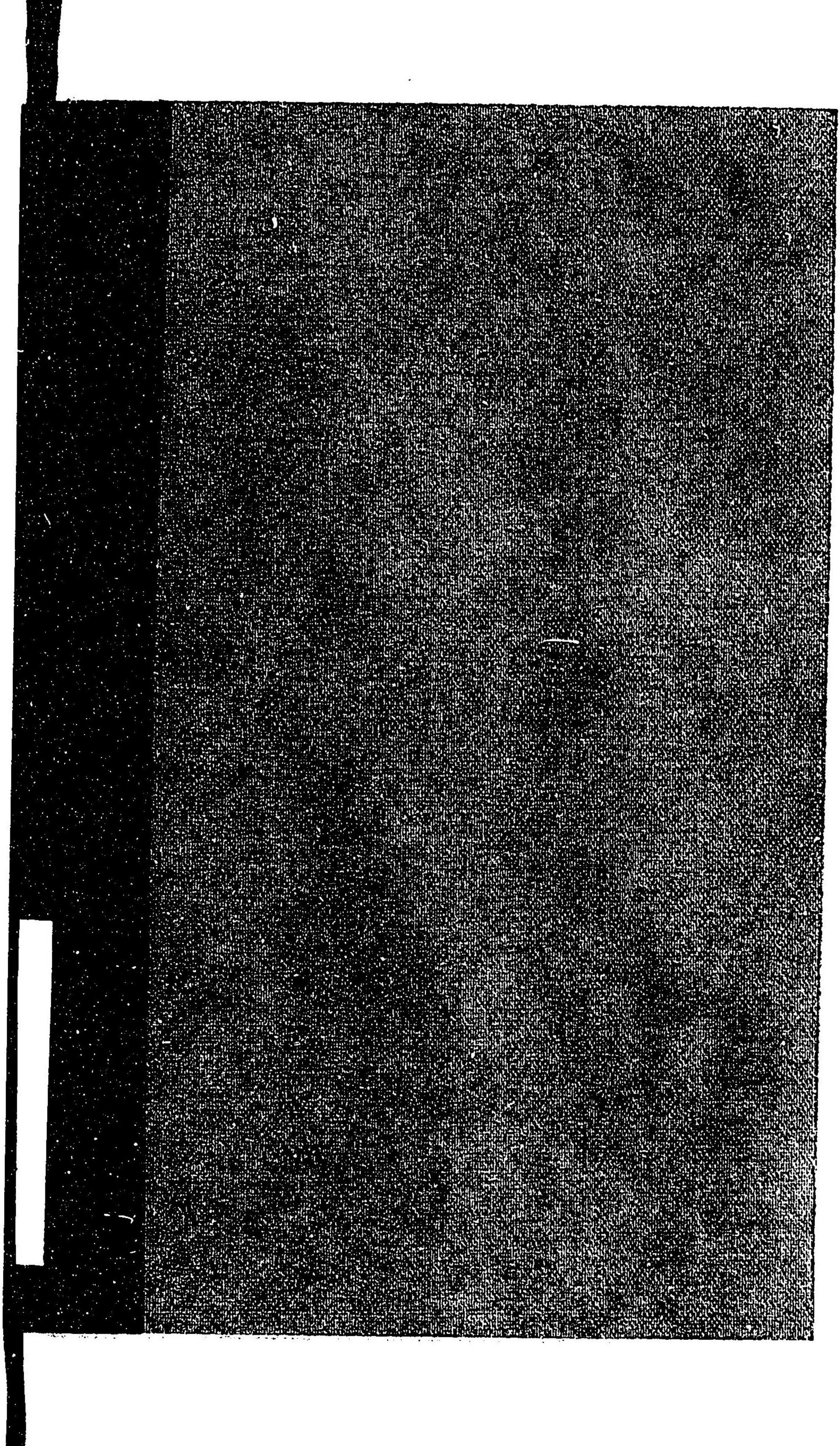
勸業懲罰の早業間、面白く可笑しき裡に忠孝五常の大義を得心する事が出来るのは小説である、弊店は斯の神史小説の發行に多年の主力を注ぎ特に歴史に著名なる事蹟を主旨とし勉めて寫實的にして機軸の空説を捏造せず、殊に演者は斯道の大家で速記を以て著されてあるから、興味の多い事は講談を聞て居るのと少しも異なる所がない、喜怒哀樂、は素より滑稽、俳諧等交錯して人情の機軸を穿つて居る内容に最も平易である、表紙口繪は共に木版三十度摺の極彩色である紙質の精良装釘の堅固なものも弊店特色の一つであるを如何卒御購讀あらむ事を



景山

柏原奎文堂

發行





特 71  
421

武勇山村熊蔵

国立国会図書館

098293-000-0

特71-421

武勇山村熊蔵

広沢 当昇 / 講演

M42

DBU-0179

